様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３２６０８
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｈ０２７１８

研究課題名（和文）言語的マイノリティー児童の母語を基盤とした幼児期からの評価と特別支援の試み

研究課題名（英文）Attempts of Assessment and Special Support for Language-Minority Children Based on Their Heritage Language

研究代表者
権藤　桂子（GONDO, KEIKO）

共立女子大学・家政学部・教授

研究者番号：９０２９９９６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　6,300,000円

研究成果の概要（和文）：言語的マイノリティー児童（在日ブラジル人児童）の言語発達評価および支援方法について研究結果に基づいて次の提案をすることができた。（１）日本語と母語（継承語）の2言語による評価と言語環境要因を総合的に評価すること、（２）就学後の学習や社会生活の困難さを軽減するために幼児期からの支援を行うこと、（３）親や保育者が指示的声掛けを減らし、児童の興味関心に寄り添って会話の文脈を広げるような語りかけを行うこと、（４）個別の絵本の読み聞かせや繰り返し読み聞かせるなど言語概念を形成するような保育活動をすること、（５）親に対しても日本語使用の困り感を軽減するような支援施策を行うこと。

研究成果の学術的意義や社会的意義
多言語多文化環境で育つ児童の言語発達評価を行うにあたり、日本語だけに偏らない母語（継承語）を含めた2言語による評価や環境要因を含めた包括的な評価をする必要性を指摘した。また、絵本の読み聞かせを丁寧に繰り返し行うこと、親の日本語学習や日本文化理解の機会を増やすこと、さらに年少児への親の継承語によるかかわりにおいて指示的な発話を減らし、児童の気持ちに沿った発話を増やすことなどが児童の言語発達促進に役立つということを指摘した。

研究成果の概要（英文）：Based on the results of the study, we were able to propose the following points regarding the evaluation and support of language development of linguistic minority children (Brazilian children living in Japan). They are: (1)Evaluation in two languages, Japanese and their first language(inherited language) and comprehensive evaluation of linguistic environmental factors; (2) Support from early childhood to reduce difficulties in learning and social life after entering school; (3) Parents and caregivers should reduce instructions and directions to children and be close to children's intersts and talking to children in a way that expands the context of conversation; (4) Conduct childcare activities tha form linguistic concepts, such as reading picture books individually and repeatedly to children, and (5) Provide support measures to alleviate the sense of trouble for parents to use Japanese.

研究分野：発達心理学

キーワード：多文化多言語　バイリンガル　在日ブラジル人　言語環境　母語支援　特別支援　継承語教育　母子会話

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年、我が国において多文化多言語環境で育つ児童が増加している。2 言語併用環境で育つ言語的マイノリティー児童は日本語力の弱さから本来の言語力を過小評価される傾向があるため適切な言語発達評価や特別支援方法の開発が急務である[①]。

米国では、幼児期からの支援がその後のコミュニケーション力や学習成績の向上につながったとの報告があった[②]。また、母語支援が日本語学習、自己肯定感、アイデンティティ形成等の促進、家族内コミュニケーションの維持に役立つことが報告されていた。さらに、これら児童の支援は、社会的・人的資源である多様な母語使用者の育成に繋がり、将来の豊かな社会形成の力となるとの指摘があった[③]。我が国では、これら児童の早期からの言語習得の重要性に対する認識が低いため、特別支援は主に就学後に開始され、幼児期の支援はほとんど行われていない。

幼児期の支援方法として、指導や訓練ではなく自然場面での質の高い相互作用的なかかわりが有効であることから[④]、親子のコミュニケーション改善への支援や絵本の読み聞かせ活動の有効活用について研究をする必要がある。

２．研究の目的

(1)　在日ブラジル人児童の家庭および保育施設の言語環境や親の日本語使用時の困り感の実態を捉え、児童の言語発達と言語環境要因との関連性を検討することで幼児期からの支援に関する基礎情報を得る。

(2)　在日ブラジル人児童の母親の言語的かかわり方の特徴を捉え、児童の言語発達促進のための親の効果的な語りかけ方について考察する。

(3)　在日ブラジル人児童の語彙力を評価する方法としてポルトガル語と日本語の 2 言語による語彙力評価を試み、評価方法の妥当性を検討する。

(4)　在日ブラジル人児童に対して、優位言語であるポルトガル語による絵本の読み聞かせが、日本語による読み聞かせの理解を補い、ひいては 2 言語の語彙力向上やナラティブ産出（読み聞いた絵本の内容を再話する）の向上に繋がるかを検討する。

３．研究の方法

(1)　幼保小に通っている 4 歳から 12 歳の在日ブラジル人児童の親 41 名を対象としてアンケート調査を実施し、親の言語使用状況や日本語使用時の困り感と子どもの日本語使用との関連について調査した。また、幼児期の日本語使用度と児童期の日本語使用困難度との関連についても調査した（担当：塘）。

(2)　在日ブラジル人母子 10 組（子の平均月齢 33 か月：男児 8 名女児 2 名）と日本人母子 10 組（子の平均月例 26.5 か月:男児 5 名女児 5 名)を対象に遊び中の母子会話場面をビデオ録画し、その内 10 分間の母子会話逐語記録を作成して母親の発話を分析した。分析項目は、発話総数、自立語平均発話長（1 発話内の自立語数の平均)、異なり語数（10 分間に使用された異なる語彙の総数)、語りかけのタイプ（文脈的な発話か脱文脈的な発話か）であった。文脈的な発話とは、「今、ここ」で起こっていることについての発話であり、脱文脈的発話は、「今、ここ」で起こっていることについてではない発話である（担当：松井)。

(3)　在日ブラジル人児童 17 名（平均年齢 5 歳 9 か月：女児 8 名、男児 9 名）に表出語彙テスト（図版に描かれた具体物の絵を見せて名称を問うもので 100 項目ある）をポルトガル語と日本語で施行した。語彙力をポルトガル語の得点、日本語の得点、conceptual vocabulary 得点を用いて評価した。Conceptual vocabulary は少なくとも 1 言語で言えればその語彙は習得されたものとみなす方法で語彙力を過小評価する危険性を回避する方法である[⑤⑥]。また、言語環境要因についても調査し、家庭・保育所・地域の使用言語、きょうだいの有無、親の日本語レベル、リテラシー環境との関連から総合的に評価し、児童の 2 言語習得のタイプについて考察した（担当：権藤、稲岡)。

(4)　在日ブラジル人児童 16 名を語彙力、認知力、年齢、性別などの条件を統制した上で 2 言語群（平均年齢 5 歳 6 か月、女児 3 名、男児 5 名）と日本語群（平均年齢 5 歳 6 か月：女児 3 名、男児 5 名)の 2 群に分けた。2 言語群の児童には、まずポルトガル語で絵本の読み聞かせを行い、次に同じ絵本を日本語で読み聞かせた。日本語群の児童には日本語で 2 度読み聞かせをした。読み聞かせは個別で行った。読み聞かせの直後に絵本の内容を日本語で、その後ポルトガル語でも再話してもらい録音した。再話内容をそれぞれの言語で逐語記録に起こし、発話数、平均発話長、異なり語彙数を算出した。また、ナラティブ産出の分析では、登場人物や物語の内容を把握して

いるかを得点化し、2 群間の比較検討をした（担当：権藤、稲岡）

４．研究成果

(1)　親へのアンケート調査の結果および考察は次のとおりである。①親の日本語使用困り感と児童の日本語使用困難度には幼児期・児童期ともに相関がみられ、特に児童期の学習や同輩関係の困難さにも繋がっていた。また、幼児期の日本語使用度が低いほど児童期に日本語使用時の困難度が高いという結果であった。幼児期の日本語使用度の低さが児童期に持ち越されないためにも幼児期からの早期言語発達支援が必要である。②児童の日本語支援の質と量の向上に向けて、まず、幼児期の発達特性を踏まえて遊びの中で具体物とその名称を一致させる取り組みや身体活動や表情などを通して言語概念の形成を促すことが必要である。次に、絵本の読み聞かせは、幼児期の言語発達支援だけでなく、児童期に必要な学習言語の促進にもつながる重要な保育活動であることから、個別の読み聞かせの時間を利用して、できるだけ児童の発言を促す取り組みが必要である。③親の日本語使用困難度は、親子にとって日本社会で得られる情報の内容が狭められることにも繋がっていく。児童への支援に加えて親に対しても日本語や日本社会を理解するための学習の機会や支援制度を作ることによって児童の日本語学習の下支えとなると考える。

(2)　母親の言語的かかわりについての分析の結果および考察は次のとおりである。①発話数、語彙数、平均発話長など、言語入力の量的側面については日本人の母親に比べ発話数も多く、平均発話長も有意に長く、異なり語数も多い傾向がみられた。つまり、在日ブラジル人の母親は児童に沢山語りかける傾向がみられた。②言語入力の質について在日ブラジル人の母親は脱文脈的発話の頻度が低い傾向があった（図１）。就学前の脱文脈的な会話が子どもの言語発達および就学後の学習言語の取得を促進するという先行研究[7]を踏まえると、「説明」、「ふり」、未来や過去についての会話や物語を含む「ナラティブ」など、「今、ここ」についてではない脱文脈的発話を児童の年齢があがるにつれてより高頻度で使ことが望ましい。③在日ブラジル人の母親は、文脈的発話の中でも、「依頼・指示」の発話頻度が高い傾向にあり、児童の言語発達にとってはあまり効果的なかかわりとは言えないため、児童の注意がどこに向いているかを意識し、それに沿うような発話をすることが望ましい。

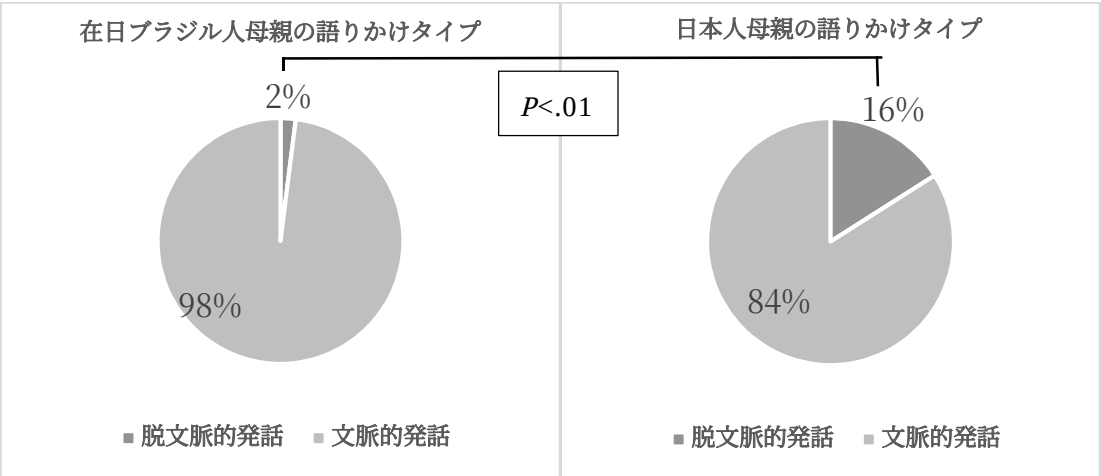

図１．母親の語りかけタイプの比較

(3)　語彙力調査の結果を図 2 に示した。ポルトガル語の正答数の方が日本語よりも年中児（4 歳児クラス）年長児（5 歳児クラス）ともに高かったことから、本研究の参加者は全体的にポルトガル語優位であったと言える。この結果は、家庭でほとんどポルトガル語が使用されていること、保育士は日本語話者だが児童がほぼ全員ブラジル人であり保育所での日本語入力に限界があることなど、ポルトガル語優位の環境の影響だと考えられる。また、日本語の正答数が年中、年長児間に差がないのに比べ、ポルトガル語は年長児の方が有意に高かった。これは、当該保育所で年長児に毎日ポルトガル語の授業を取り入れている成果だと考えられる。Conceptual vocabulary については、ポルトガル語または日本語だけの 1 言語評価に比べて高い評価が得られ、2 言語で評価することによって児童の語彙力をより適切に評価できることが示された。また、言語環境要因と語彙力テスト結果を総合的に評価することで、児童の言語発達に、①日本語を母語としてポルトガル語を習得する同時バイリンガル、②ポルトガル語を母語として日本語を習得する継続バイリンガル、③ポルトガル語を継承語として日本語を習得する同時バイリンガル、④偏りのない言語発達を示す児童というタイプの違いを見出すことができた。評価や支援の際には、言語テストの結果だけではなく環境因子も含めた包括的な評価が必要である。また、各児童のタイプによって効果的な支援方法を見出す必要がある。

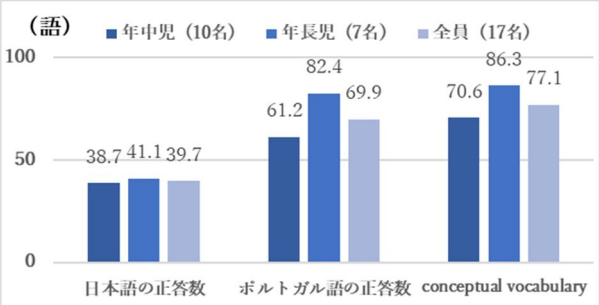

図２　各言語の正答数およびconceptual vocabulary

(4)　2 言語による絵本の読み聞かせ課題の結果は次のとおりである。なお、ポルトガル語による再話については現在分析を継続中のため、日本語による再話の分析についてまとめる。発話数、平均発話長、異なり語彙数については全て日本語群の方が高得点であった、また、再話内容についても登場人物の把握には群間差はなかったが、物語の再話得点は日本語群の方が高かった（図3）。日本語だけで繰り返し 2 度読み聞かせた方が日本語による再話課題では好成績を得たことから、繰り返し読み聞かせることが日本語習得に対する効果が高いという結果となった。保育の場では、同じ絵本の読み聞かせを繰り返し行うことが重要である。ポルトガル語による読み聞かせが、絵本の内容把握を促進するのか、また、2 言語習得やナラティブ産出を促進するのかという当初の目的については、ポルトガル語の再話分析結果や今後の縦断研究の結果を待ちたい。

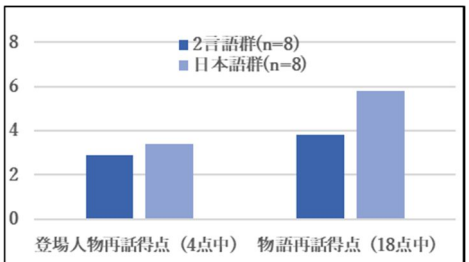

図3．再話課題得点

＜引用文献＞

① 権藤　桂子、特集論文企画：多文化多言語環境とコミュニケーション障害　特集にあたって、コミュニケーション障害学、31 巻 2 号、2014、80
② Weiss,S.R., INREAL Intervention for Language Handicapped and Bilingual Children, Journal of the Division for Early Childhood,4,1981,40-51
③ ジム・カミンズ（著）中島和子（訳）、言語マイノリティを支える教育、慶應義塾大学出版会、2011、17-19
④ 前掲②
⑤ Pearson,B.Z., Fernandes,S.C., and Oller,D.K., Lexical Development in Bilingual Infants and Toddlers:Comparison to Monolingual Norms, Language Learning,43,1993,98-120
⑥ Mancilla-Martinez,J., Pan,B.A. and Vagh,S.B., Assessing the Productive Vocabulary of Spanish-English Bilingual Toddlers from Low-income Families, Applied Psycholinguistics,32,2011,333-357
⑦ Demir,O.E., Rowe,M.L., Heller,G., Gold-Meadow,S., and Levine,S.C., Vocabulary, Syntax, and Narrative Development in Typically Developing Children and Children with Early Unilateral Brain Injury: Early Parental Talk about the There-and-then Matters, Developmental Pshychology,51(2),2015,161-175

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 Wice Matthew、Matsui Tomoko、Tsudaka Gen、Karasawa Minoru、Miller Joan G.	４．巻 52
２．論文標題 Verbal display rule knowledge: A cultural and developmental perspective	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Cognitive Development	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.cogdev.2019.100801	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 権藤桂子	４．巻 67
２．論文標題 ブラジルにルーツを持つ幼児の2言語による語彙発達評価の試み	５．発行年 2021年
３．雑誌名 共立女子大学家政学部紀要	６．最初と最後の頁 39-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 Gondo,K.	４．巻 ―
２．論文標題 Assessment of Lexical Development in Preschool Children with Brazilian Roots and Attempte to Support Language Development based on Their Heritage Language	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Child Research Network	６．最初と最後の頁 ―
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

１．著者名 Sudo Mioko、Matsui Tomoko	４．巻 182
２．論文標題 School Readiness in Language-Minority Dual Language Learners in Japan: Language, Executive Function, and Theory of Mind	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The Journal of Genetic Psychology	６．最初と最後の頁 375～390
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00221325.2021.1930994	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 塘利枝子
2．発表標題 日本語を母語としない乳幼児の発達に関与する要因－フィールドワークによる予備調査から－
3．学会等名 異文化間教育学会第39回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 権藤桂子・塘利枝子他
2．発表標題 言語的マイノリティー児童のアセスメント方法とその課題
3．学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 Rieko Tomo
2．発表標題 Cultural Comparison of mother-child conflict Styles displayed in East Asia and EU countries School texts,
3．学会等名 16th European Congress of Psychology（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Keiko Gondo
2．発表標題 Language Development of Nursery School Children with Japanese-Brazilian Heritage in Japan
3．学会等名 20th Pacific Early Childhood Education Research Association International Conference（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 松井智子
２．発表標題 言語をはぐくむ環境づくり：日本で生まれた多文化多言語児童の発達
３．学会等名 東京学芸大学公開講座
４．発表年 2019年

１．発表者名 塘利枝子・権藤桂子他
２．発表標題 多文化・多言語環境と発達障害
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 塘利枝子
２．発表標題 外国につながる幼児に対する保育者の戸惑い－保育者からの相談内容の語りを通して－
３．学会等名 日本教育心理学会第62回総会
４．発表年 2020年

１．発表者名 権藤桂子・稲岡プレイアデス千春
２．発表標題 ブラジルにルーツのある幼児のConceptual Vocabulary評価の試み
３．学会等名 第46回日本コミュニケーション障害学会学術講演会
４．発表年 2020年

１．発表者名 権藤桂子
２．発表標題 2言語環境で育つブラジルにルーツをもつ幼児の言語発達に関する研究
３．学会等名 第73回日本保育学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 権藤桂子・塘利枝子・松井智子・稲岡プレイアデス千春
２．発表標題 多言語児童の教育ニーズと幼児期からの言語発達支援
３．学会等名 第33回日本発達心理学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計6件

１．著者名 滝浦真人編著・松井智子他	４．発行年 2018年
２．出版社 放送大学教育振興会	５．総ページ数 242
３．書名 『新しい言語学』	

１．著者名 日本発達心理学会編　尾崎康子責任編集・森口祐介責任編集・松井智子他	４．発行年 2018年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 308
３．書名 発達科学ハンドブック第9巻『社会的認知の発達科学』	

１．著者名 秦野悦子他編著・権藤桂子他	４．発行年 2017年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 348
３．書名 講座・臨床発達心理学5　『言語発達とその支援』	

１．著者名 田中廣明・秦かおり・吉田悦子・山口征孝・松井智子	４．発行年 2020年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 292
３．書名 『動的語用論の構築に向けて』　第2巻	

１．著者名 藤田郁代・深浦順一・藤野博・石坂郁代・松井智子	４．発行年 2021年
２．出版社 医学書院	５．総ページ数 320
３．書名 『言語発達障害学　第3版』	

１．著者名 Schneider,K.P., Ifantidou,E., Matsui,T.	４．発行年 2020年
２．出版社 De Gruyter Mouton	５．総ページ数 737
３．書名 Developmental and Clinical Pragmatics	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	塘　利枝子 (Tomo Rieko) (00300335)	同志社女子大学・現代社会学部・教授 (34311)	
研究分担者	松井　智子 (Matsui Tomoko) (20296792)	中央大学・文学部・教授 (32641)	
研究分担者	稲岡　プレイアデス千春 (Inaoka PureiadesuChiharu) (90507386)	金沢大学・保健学系・助教 (13301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関